

クレジット:

UTokyo Online Education 東京大学朝日講座 2020 清水 晶子

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



望まない他者との 居心地の悪い共生

東大朝日講座 「不安の時代」

2020/11/11 16:50- 清水晶子（総合文化研究科 教授）

0. イントロダクション

今日の流れ

テーマ：「選び取られたわけではない近接性」（ジュディス・バトラー）について

お話の進め方：

1. 「ダイバーシティ」「多文化共生」を考える
2. 「みんな違って、みんな良い」の誤謬
3. AIDS アクティヴィズムと「私たちはここにいる」
4. 選び取られたわけではない近接性

1. 「ダイバーシティ」「多文化共生」を考える

1-1. 「タイフード屋台モデル」

- イノベーションを生むものとしての／文化を豊かにするものとしての
- 「ダイバーシティとは無害な差異の謂（いい）である」（チャンドラ・モハンティ）
「タイフード屋台モデル」（サラ・アーメッド）
- 既存の制度や規範を脅かすことなくそこに幸福な彩りや豊かなスパイスを提供する
＝消化できる形で消費に供された差異

1. 「ダイバーシティ」「多文化共生」を考える

1-2. 誰のためのダイバーシティか

- ふたつの問題
 - 消化／消費する側 v. 消化／消費される側
 - どこかからやってきて、どこかに去っていく？
 - 多数派と少数派：数の問題に還元されない、中心か周縁か
 - 多数派のためのダイバーシティ＝多数派の利益を最大化する目的のために差異が動員される
- しかし本来ダイバーシティとは、ある集団、ある社会の多数派が当然の前提としてきた事柄を、当然ではなく批判されうるものとして相対化することと、不可分のはず

2. 「みんな違って、みんな良い」の誤謬

差異のフラットな並列

- 「多様性の尊重」の罠

様々な「差異」には様々な異なる負荷がかかっている

(有利な差異、不利な差異、売れる差異、不都合な差異...)

→ 「みんな」が同じように「違う」わけではないので、「みんな」がどれも「良い」になるためには、一手間が必要になる。

- そもそも「みんな」とは誰なのか

みんながハッピーになるダイバーシティ??

3. AIDS アクティヴィズムと「私たちはここにいる」

3-1. 80年代米国のAIDS大流行

- 1981年 米国で感染拡大が観察され始める
「ゲイの癌」 「4H disease (Heroin users, Homosexuals, Hemophiliacs, Haitians)」
- 社会的な周縁層 → 「その命が失われないように社会としてできる限りの努力をするだけの価値はない人々」とみなす
- すでに感染が拡大している周縁部から中枢部を守る → 「犠牲者」から「脅威」へ
↓そこにゲイ男性についてのもともあった社会的偏見も加わる
政府による「見殺し」とヘイト・クライム（憎悪犯罪）の悪化

3. AIDS アクティビズムと「私たちはここにいる」

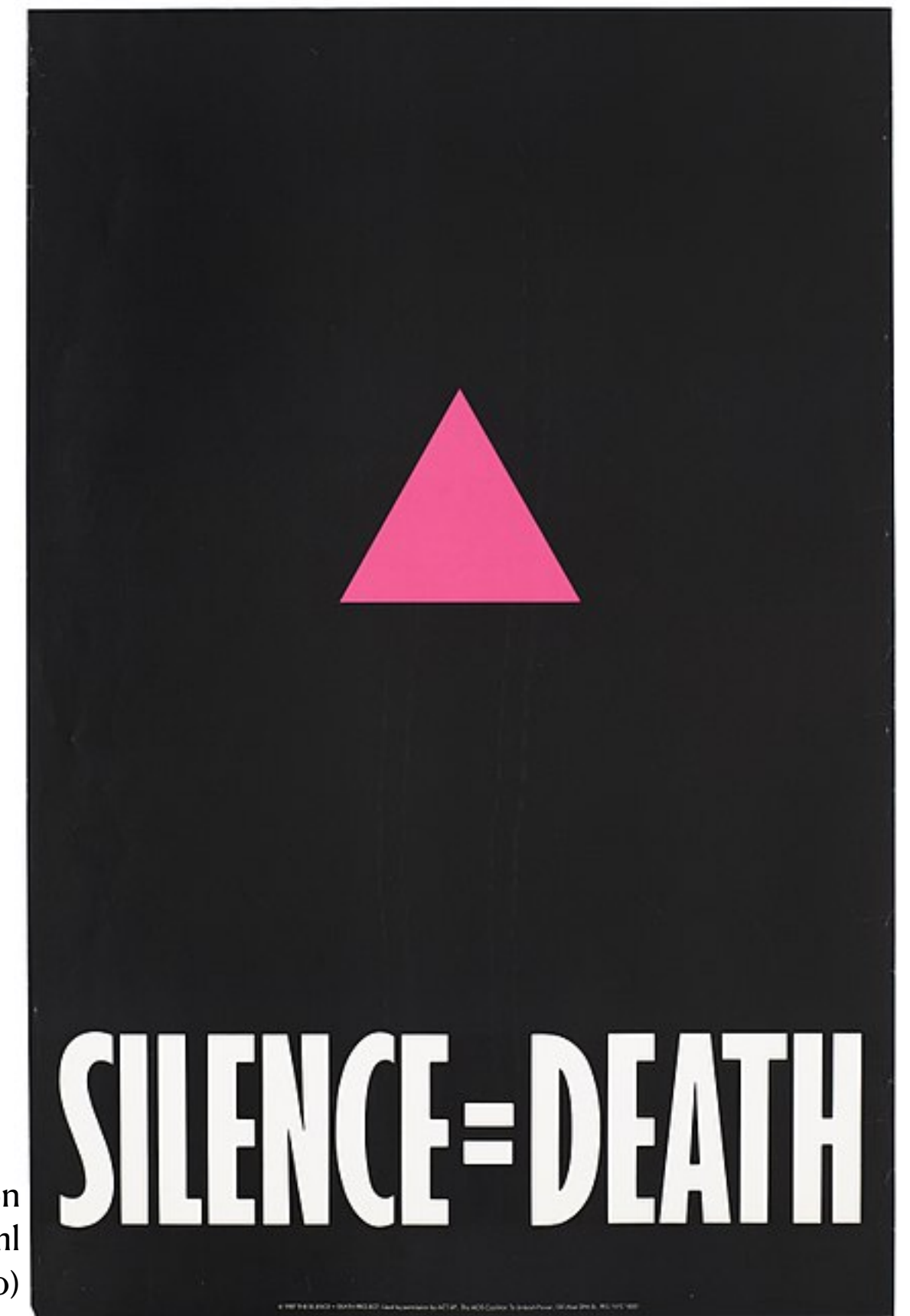
3-2. AIDS アクティビズムとクィア・ムーブメント

- AIDS アクティビズムの誕生：ウィルスと社会的抑圧の双方から自分たちを守るための運動
生存の権利の主張
- 「沈黙＝死」 (ACT-UP, The AIDS Coalition To Unleash Power.
1987)
- → クィア・ムーブメント：unapologeticな（悪びれることのない、
弁解なしの）差異の主張と生存の宣言

“I hate straights.”

“We’re here, We’re queer. Get Used to it.” (Queer Nation)

image by ACT-UP © 1987 The Silence=Death Project 1987 ACT-UP from Wellcome Collection
<https://wellcomecollection.org/works/d2mxjdkb?wellcomeImageUrl=/indexplus/image/L0052822.html>
Attribution-NonCommercial 4.0 International (CC BY-NC 4.0)



4. 選び取られたわけではない近接性

4-1. ジュディス・バトラーと他者への根源的依存

- 社会的な動物であるヒトは、その存在の根源において他者に依存している（バトラー）
ケアの必要／根源的な傷つきやすさ（vulnerability）と、その否認
→ 私が存在のために他者を必要とするまさにそれ故に、他者は私にとって脅威になりうる
- “We’re here, We’re queer. Get Used to it.”
「人々が路上に集まる際にはひとつの含意が明確であると思われる。すなわち、彼らは今でもここにいるし、あそこにもいる。彼らはずっと居続ける(persist)」 (Judith Butler, *Notes Toward a Performative Theory of Assembly* (Harvard U.P., 2015) p.25)
→ 存在を許容されていないはずのもの達による、「そこにいること」を通じた存在の主張

4. 選り取られたわけではない近接性

4-2. 連帯と共存の可能性

- 「選り取られたわけではない近接性の諸様態において差異を超えて共に生きること」 (Butler, 2015, p.27)
- これは調和の取れた、平和な共存状態を指し示すものではない＝不安をもたらす
 - 「ほとんどの時、あなたは芯から脅かされているように感じるし、そう感じないとしたらあなたは実際のところなんの連合もしていない...連合が好きだから連合に向かうわけではない。自分を殺すかもしれない人と組んでみようかとあなたが考える唯一の理由は、それ以外に生き延びる方法を思いつけないからだ」 (Bernice Johnson Reagon, "Coalition Politics: Turning the Century" in *Home Girls: A Black Feminist Anthology*, ed. Barbara Smith (New York: Kitchen Table: Woman of Color Press, 1983) pp.356-7)
- 性急な不安の解消へと向かわないこと＝相互の根源的な傷つきやすさを承認することこそが、共存の可能性を開く

グループワークのテーマ

社会の多数派に属する人々が「選びとられたわけではない近接性」を拒絶しようとしている例を挙げて、その人々の不安にどう対処すべきかを、考えてみてください。